

「エコライフ」という生活者価値

わたしの「ゴミ拾い」考

七尾 純

Written by Jun Nanao

環境教育の始まり

環境教育が小学校教育に取り入れられては
や十五年がたち、手探りで始まった環境教育も
徐々に定着しているようです。

日本で環境教育の取り組みが始まったのは一九
六九年の中学校保健体育科の改訂からで、その中
にはわずかながら環境教育の萌芽がみられます。

欧米ではそれよりも早く、既に一九六〇年
代から始まっています。酸性雨、ダイオキシン、
森林の砂漠化、地球温暖化など環境の異変が
深刻化し、イギリスで出された「ブラウン報告」
(一九六七年)に始まり、アメリカ合衆国では環
境教育法制定(一九七〇年)、さらにストックホ
ルム国連人間環境会議(一九七二年)を経て、
環境教育の必要性が国際的に認知されるよう
になりました。

それを受けてわが国では、教育課程の基準
を定めた学習指導要領の改定が中学校保健体
育科(一九六九年)に始まり、ついで中学校お
よび高等学校の社会科、理科および保健体育
科(一九七七 - 一九七八年)の改定で環境教育
に関わるテーマが充実し、環境教育への取り組
みが明確化されました。

小学校教育に環境教育が取り入れられたの
は一九八九年です。環境教育に大きく関わる「生
活科」が新設され、さらに二〇〇三年から「ス
タイ」した「総合的学習の時間」の内容の一つとして
「環境」が学習指導要領に明記されました。

環境教育の実践はたいへん

環境教育の重要性は議論の余地はありませ
んが、しかしいざ実践となるとたいへんです。テ

マがあまりにも大きく、しかも政治や経済、国際
関係などと多岐にわたって絡み合っているために
子どもの理解力を考えての指導となると、教師
の教育技術をはるかに超えています。そこで手っ
取り早く考えられる方法が「ゴミ拾い」です。

発足当初は、全国どの小学校でも判を押
したように「美化デー」や「クリーン作戦」とい
う名の「ゴミ拾い」が行われました。大きな「ニ
ール袋をひきずって、「ゴミはさみを手に、学校の
周辺や近くの公園や河岸の草むらなどに落ち
ている「ゴミ」を拾い集めるのです。

「ゴミ拾いに汗を流している子どもたちを見か
けると、「いっくらうさん」と声を掛けたくなり、
わたしも何度が仲間入りしたものです。しかし
よく考えてみますと、これにはいささか首を傾
げてしまいます。「しつけ」としての「ゴミ拾い」
は意味がありますが、環境教育としては大きな
盲点があります。それは、「ゴミ拾いは決して環
境保全には結びつかないからです。「ゴミ」を拾って

その場からゴミが消えたとしても、ゴミは依然としてゴミ袋の中にあります。つまり移動しただけ。やがてそのゴミは収集されて、焼却されたり埋められたりするわけですから、環境に対する負荷は何ら変わってはいないのです。

「くくく」拾いを繰り返しても、捨てる人がいるかぎりゴミはなくなりません。いつもきれいな「くくく」でおしま。一時その場所がきれいになつたとしても、何日かたつとまた「くくく」の山。この繰り返しでは、環境教育を実践して「くくく」といつありバイ作りに終わってしまいます。ノルゲを果したただけの「くくく」からは本来の目的、地球環境全体に対する広い視野や深い洞察は決して生まれてきません。誤解を恐れずに言わせていただくなら、心ない誰かが捨てた「くくく」を拾わせるなんてナンセンス。第一、子どもに失礼ではないかと反発したい気持ちにもなつたものです。「くくく」拾いに環境教育的意味を持たせるとすれば、「くくく」は拾ってもなくならないことに気がつかせ、「くくく」が環境にどんな負荷を与えるかを学び、「くくく」を捨ててはいけない」「くくく」を学ばせる」とではないでしょうか。そのねらいがばやけてしまつた「くくく」拾いは「きりきり」やめまじゅうです。

「くくく」拾い「から」
「くくく」を捨ててはならない「くくく」

仕事柄、わたしは取材でときどき各地の小学校を訪れます。そんなときかならず環境教

育の実践についてたずねることがあります。しかしたいていの返事は「美化デー」や「クリーン作戦」。その写真を見せていただきながら、わたしは喉から出かかりそんな「くくく」拾いはやめまじゅう「くくく」をくくくとおさえ、「くくく」を拾う人間ではなく、くくくを捨てない人間を育ててください」とお願いしたものです。

そういつわたしも子どもも頃、親の言いつけでよくくくくを山や川に捨てに行つたものです。落ち葉、壊れたおもちゃ、残飯などなど。ですから「くくく」は山や川に捨てるものだと思ひ込んでいたほどです。橋の上から残飯を投げ捨てるくくくを光らせ、しぶきをあげながら魚が集まってくる。それが面白くて、残飯の投げ捨てを買つて出たものです。それでも環境に何の影響もなかつたのは、ほとんどの「くくく」は、やがては分解してしまつたのだつたのと、山や川に強い復元力があつたからです。

しかし今は、そうはいきません。分解せず、いつまでも形をとどめる「くくく」が毎日大量に吐き出され、自然の復元力では到底追いつきません。その上現代は、化学化合物を含んだ排水や排気ガス、ダイオキシンなど目に見えない「くくく」も戦わなければなりません。

くくくした中で手探りをつづけるうちに、学校の指導も大きく変わってきたようです。特に総合学習が定着した今、「くくく」拾いのための「くくく」拾いは徐々に姿を消し、代わつて各地の小学校で「くくく」な「くくく」拾いが行われるようになってい

ます。昨年九月、NHKテレビで、「くくく」を学習に結

びつけて実践している小学校が紹介されていました。玄界灘に浮かぶ福岡県相ノ島にある町立相島小学校(全校児童九人)です。

三年生のクラスはたった二人だけ。先生ははにかみ屋さんのこの二人に、自分で調べたことをじっくり人に伝える力をつけさせようと考え、浜に流れ着く「くくく」を目をつけました。島に流れ着く漂着物を回収し整理することで、自分たちの島がどついつ位置にあり、世界とどつ関わつているか発見させる授業に取り組んでいるのです。

二人の活動は、まず海岸の「くくく」掃除から始まり、その整理・分類・課題をみつめることに発展。さらには海流のなぞの調査のために、本やインターネットにとまらず、地元の漁師さんに話を聞いたり、自ら実験を工夫したり、さらには島を出て他の小学校の三年生の前で、自分たちの調べたことを発表するなど、先生と児童二人の小さなクラスの奮闘振りを伝えていました。

このドキュメントをみて感心したのは、二人は教師に指図されるまでもなく、くくく自然な振る舞いとして「くくく」拾いをしていくことです。この子たちにとつて「くくく」は宝物。思いがけない宝物が見つかる入水(浜)が汚れた「くくく」に埋もれてしまわないよう一杯守っているのです。

全校生徒でカシガエルの観察をつづけながら、カエルのすみかを守るつと毎日のように川の「くくく」拾いに汗を流す子どもたち(島根県平田市鰐淵小学校)や、絶滅寸前の淡水魚、ムナシト「くくく」を守つて、休日も夏休みも返上して稚魚を飼育し、秋の放流にそなえて川の「くくく」拾いを

「エコライフ」という生活者価値

つづける子どもたち(埼玉県熊谷市佐谷田小学校)など、命の学習に結びつけてゴミ拾いが行われています。ゴミを拾うにつれてゴミ拾いが行なはれ、ゴミを捨ててはならないことを身について学んでいくでしょう。

また空き缶を拾い集めてオブジェを作ったり、使い終わった紙バクを熱湯でほぐし、取り出したパルプでバガキを作ったりするなど、ゴミ拾い



鱒淵小学校の子どもたち



を造形教育に結びつけている学校もあります。活かして使えばゴミもまた大切な資源です。こうした作業をしながら缶を作るためにどれほど膨大な資源が使われているのか、紙バクを作るためだけに地球のどこかで毎日八千本の木が切り倒されているという現実にも目を向けさせ、毎日のくらしがどれだけ地球に負荷を負わせているのかに気づかせようという指導計画です。このように学習活動の中に明確に位置付けられたゴミ拾いなら、環境教育としても大いに意味があります。

子どもの力は恐るべし

見えないゴミ、酸性雨調査の先駆けとなったのは全国の子どもたちによる「マサカオしるべ」

です。葉や花びらに酸性雨で脱色した斑紋があるかどうかを調べるものです。十年ほど前、ある学習科学雑誌が、読者に酸性雨被害の実態を知ってほしいとの考えで調査を呼びかけたところ、全国から数百件の報告があり、酸性雨被害が全国にひろがっていることがわかりました。この調査をもとに作られた全国酸性雨地図はインターネットでも公開され、酸性雨の実態を把握するための貴重なデータとして評価されています。

また川や湖の水質調査もしかり、その成果は教師のもくろみをはるかに超えるものです。まさに子どもたちの力、恐るべしです。

こうしたさまざまな活動を経験した子どもたちが大人になつたとき、日本の環境保全の取り組みも、今とはすいぶん変わっているにちがいないと、わたしは期待しています。

CEL

◎七尾 純(ななお・じゅん)

フリーライター。一九三六年秋田県生まれ。玉川大学通信教育に学び、児童施設指導員、学習研究社編集長を経て、六九年にフリーライターとなり、絵本、幼年童話、児童向け科学書の分野での活動をつづけている。主な著書は、『手にこぼれをのせて』、『タゲリ舞う里に』、『水の総合学習』、『土の総合学習』(全てあかね書房)、『写真絵本シリーズ』、『自然からきら』、『新自然からきら』、『いずれも偕成社』、『だれがつけたの草木のなまえ』、『これがほんとう? 恐竜のすがた』(いずれもアリス館)、『環境ことは事典』(大日本図書)など。

生活者が始める身近な「エコライフ」